

惲代英の五四時期の思想

——日記を中心に—— (一)

後 藤 延 子

序 章

近十年来、惲代英に関する研究環境は大きく変化した。まず八十年代前半に、『惲代英日記』(八一年、中共中央党校出版社)、『来鴻去燕録』(八一年、北京出版社)、『回憶惲代英』(八二年、人民出版社)、『惲代英伝記』(田子渝・任武雄・李良明共著、八四年、湖北人民出版社)、『惲代英文集』(上・下、八四年、人民出版社)が相繼いで公刊され、惲代英研究の基礎資料が整備された。そして八五年の生誕九〇周年を記念して出版された『惲代英學術討論會論文集』(華中師範大学出版社)の出現は、惲代英研究が本格的な途についたことを如実に示す出来事であった。

日本でも七九年の小野信爾『五四時期の理想主義——惲代英のばあい』(東洋史研究三八巻二号)が先鞭をつけて以来、今日まで合計六本の論文が生み出された。また五四時期が中心で、それ以後の三一年の刑死に至るまでの時期には触手が伸びていないとはいえず、長足の前進を遂げたと評してよい。宇佐美誠次郎氏が、エドガー・斯诺の『中国の赤い星』の翻訳に際し、惲代英を音訳をたよりに「温得応」と苦心惨憺して字を当てた頃から比べると、まさに隔世の感がある。

筆者は八二年三月、『惲代英の出版——五四前夜の思想』(信州大学『人文科学論集』第十六集)を発表した。執筆当時は『惲代英日記』すら入手していず、資料的制約の大きさには難渋させられたものである。幸いに拙論の基本線に大きな誤りはなかったと信じているが、そののち多くの基礎資料に接触可能になった今日、惲代英の五四前夜、及び一九年末までの思想と行動について、論及すべき点はまだまだ多く残されていることに気づかされた。今回、彼の日記を主要素材として用いつつ、張注洪『惲代英著訳撃年要録』(『近代史研究』八〇年四期)に拾い残された資料や未見であった資料なども参照しながら、前稿の補完を試みたいと考える。言うまでもないことだが、前稿との重複はできる限り避けるよう配慮しており、前稿の姉妹篇として併せ読んで頂ければ幸いである。両者が表裏一体をなして、五四時期を生きる惲代英という一人の個性的人物の全体像をあますところなく描き出すことができれば、筆者の意図は十分に果されたことになろう。

ところで筆者が、一九年末までの惲代英について再度稿を起こすことを企てたのは、その日記との出会いが決定的な契機をなしている。このことをまず率直に告白しておかなければならない。日記は、彼の満二十一歳から満二十四歳までに当たる、一七年、一八年二月十三日から七月十四日まで、一九年、の二年半ほどである。これが

今残っている全部だという⁽²⁾。そしてこの日記は、五四時期の青年学生のものである。目下のところ披見できる唯一のものである。それだけでなく、五四時期を生きた惲代英という若き知識人の思索と行動の軌跡を生き生きと伝えてくれる資料として、極めて貴重な示唆に富む宝庫だと言って過言ではない。

ところで惲代英の日記の物語る内容のどこに有用性があり、どこに魅力があるのか。筆者はそれを三点に整理して、以下少しく説明を加えておきたい。

先ず第一は、周知の如く惲代英は、五四時期に中国各地に簇生した青年学生の中で逸早く一七年十月に結成された、武昌の互助社の発起人であり、その中心人物である。そして五四運動の際には、一八年に大学を卒業してもはや学生ではなかったとはいえ、学生の敬愛と信頼を集めた先輩の青年教師として、実質上の指導に任じた人物である。彼は自ら積極的にピラを作り、また武漢学生聯合会から宣伝文書の起草や助言を求められるなど、武漢の五四運動で積極的に活躍している。更に一九年十月には、当時の青年学生会の結社の中で最大の、そして唯一の全国組織である少年中国学会に加入している。そして同会のリーダー王光祈の工読互助団の呼びかけと相呼応して新生活についてのプランが徐々に熟して行き、一九年末、惲代英は母校中華大学の附属中学部主任の職を辞して、自らの理想社会建設の第一歩を踏み出している。

以上の惲代英の一九年末までの歩みは、五四時期の青年学生のみならず最も典型的な足取りを示すものと見てよからう。従ってその辿り来った道筋を克明に記録した彼の日記は、この時期の青年学生思想と行動を照し出す、最も有用にして最も魅力に富む資料だと言うことができる。

次に第二の日記の有用性、魅力はどこにあるか。それは、日記中に述べられた、道徳的修養の重視とその実践、キリスト教青年会(YMCA)との関わり、アナーキズムへの心酔、職業神聖・備読主義の提唱、教育救国論の立場に立った教育改革の模索、プラグマティズムと科学的合理主義への傾斜、伝統儒教への批判と新しい世界観・道徳哲学樹立の試み、及び世界の動向の中における中国の前途への不断の注視と強烈なナショナルリズム等々である。これらは、各人の個性や関心のありかに従って偏りや濃淡の差はあれ、五四時期の青年学生が共有する問題意識を列挙したものと見なすことができる。だが、それらを一身に集中し、且つそれら全てに真正面から取り組んで深く思索し、徹底的に実践した人はそんなに多くは見当たらない。

惲代英の場合、万事にわたり中途半端ないい加減な態度とは縁がなかった。彼は如上の一切の問題に真剣に体当たりし、納得がいくまで考えぬき、とことんまでやってみて軽々しく安易な結論に走らない慎重さをもって、事に対処し解決して行こうとするのである⁽³⁾。彼の日記の汲めども尽きぬ味わい深さの所以はここにある。

そして第三番目の日記の有用性、魅力の所在は、そこに見られる惲代英の幅広い人間関係にある。彼は多種類の新聞や雑誌への投稿を通じて、あるいはYMCAやアナーキズムの関わりを通じて、当時全国各地で活躍している指導的人物たちと交友関係を打ち立てている。また互助社や少年中国学会などを通じて、以後の中国の行方に大きな影響力を行使した同世代の人々と親交を結び、また意識的にその成長に手を差し伸べてもいる。惲代英の稀に見る率直な資質、知的関心の多方面にわたる広さ、余人の追隨を許さぬ論理的思考力の緻密さと周到さ等々、その独特の人格的魅力の放射の下、その磁

場に幾重にも交錯した人間関係が織り成され、五四時期の中国の青年学生の豊かで具体的な人間模様の資料を提供してくれるものとなっている。

以上の三点が、筆者に日記を主な材料として五四時期の憚代英に再度取り組むことに、大きな意義を見出させた理由である。前稿で筆者は、五四運動前夜を第一期、五四運動を経て彼の理想社会実現に向けての実践に着手し、その道が結局は行き止まりであることを明瞭に認識するに至る二二年夏頃までを第二期と区分してみた。もしその区分によるならば、本稿が扱うのは、第一期、及び五四運動のち彼が中華大学附属中学部主任を辞して利群書社創設の準備に入る一九年末までの時期であり、いわば第一期と第二期への過渡期とに当たる。

そして本稿は、五四時期の青年学生の典型とも言うべき憚代英の思想と行動に焦点を当てることにより、五四運動の実像、即ちその歴史的 성격、意義、及びそのもつ可能性に迫りたい。これが第一の課題である。五四運動を担った青年学生の意識と行動とに密着し沈潜することなしに、あまりにも性急な政治的立場よりする評価が先行することに、強い危惧を抱くがゆえに他ならない。そして第二の課題は、主として武昌で成人し武昌を活動の場所とした憚代英の思想と行動の特徴、その他と異なる独自性を明らかにすることである。そしてそのユニークな特質を浮彫りにする中で、それを芽ぐみ育んできたものについても、一応の見通しをつけたいと思う。彼の理想社会像も、こうした接近の手續きを経てこそ、その全体像を開示するにちがいない。

さて以上二つの課題を認識した上で、先ず憚代英の日記に対する考察から、本稿を開始することにした。

第一章 憚代英の日記と道徳的修養

第一節 日記の資料的価値について

憚代英の日記を主要素材として本稿を進めるに当たり、日記が思想研究の資料として採用できるとしたら、その要件は何かについて、まず最初に検討を加えておく必要がある。人が日記をつける動機には、学校の教師やあるいは目上の自己の教育を担当している人の要請により提出を求められて記す、多少とも強制的な場合もある。しかし多くの場合は、備忘のため、自己反省のため、自己の思索をまとめ自己表現欲を満たすため、また時として文章修業のためなどの目的をもって、自発的であるのが一般である。

だが強制的であれ自発的であれ、日記は業務上の公的色彩を帯びた、また自然の観察などを記録した、いわゆる日誌類とは全く性質を異にするかぎり、個人の私的な日常生活の記録が紙面の大部分を占めるだろう。それゆえ日記の内容は、日々の生活上に生起する様々な事件、それに対する感慨、あるいは読書の感想、体調の記録などをぬきにしては成り立たない。それは、当人にとっては重大事ではあっても、他人にとってはさほど重要な意味をもたず、徒らに煩雑かつ瑣末で、退屈なばかりで興味をそそられぬ場合も多い。また事件の具体的なすがたや交友のありさまなど、当人にとってはわかりきったことであるため、省略されたり説明不足であったりして、他人の眼からはその詳細が把握にくい。当人に密着した情報、即ち家庭の事情、経歴、交友関係、日々の習慣や好み、社会的地位などの状況に余程精通していないかぎり、他人には理解不可能なことも多くある。

ところで個人の私生活の記録である日記も、強制的に課せられ提出が義務づけられている場合は、それは他人に見せることが前提になつてゐる。勿論その場合、不特定多数に公表される例はまず少なく、教師やあるいはその他の目上の指導者という特定の人々に限定されるのが通常である。そして日記の閲覧者が当人の個人的事情を知悉し、且つ双方の信頼関係が厚ければ厚いほど、その日記は自発的な日記に限りなく近づくであろうことは、容易に想像がつく。従つて逆の場合、その日記は著しく形式化し、偽善的色彩を強めて自己韜晦の一種のアリバイ工作に墮することも、推測に難くあるまい。⁽⁵⁾

さて自発的な日記の場合でも、全部が全部、密室の作業として自己一人のものに秘匿されて終わるとはかぎらない。なかには日記を公刊を想定して、一種の創作としても、文学上の一ジャンルである日記文学を狙う場合もあるだろう。ただ中国の文章表現のスタイルの歴史の上で、日本の平安朝文学史上に日記が占める位置の如き日記文学が成立したということを、寡聞にして筆者は知らない。魯迅の『狂人日記』（一九一八年）、丁玲の『莎菲女士的日記』（一九二八年）などが、中国における日記文学のはしりであり、それも西洋近代文学思潮の影響下に生み落とされたと見てよいのではないかと考える。⁽⁶⁾

次に当初は個人の私的メモとして私蔵するつもりで記された日記が、公刊されて不特定多数の眼にさらされる場合もある。勿論その場合、本人が自己の日記を周囲の友人や配偶者など特定の人物に限って公開しているうちに、本人の意志で、あるいは他人の説得によつて、自己の日記の公表に意義を認めて公刊に踏み切ることもある。中国ではそれは胡適の場合が恰好の例だろう。胡適の日記は、友人許怡孫の勧めで、『新青年』二巻四号から五巻三号まで合計十一回に

わたり、『感暉室劄記』として抄録のうへ掲載され、三六年に原形に復元されて『胡適留学日記』の新しい名の下に出版された。⁽⁷⁾

問題は、本人は全くの私的記録として書き残したものが、その没後、本人の諒解を得ないまま公表されてしまう場合である。そして公刊された日記の大部分は、むしろこの場合が圧倒的だと見てよい。言うまでもなく公表するには、それだけの資料的または文学的価値が認められてのことである。が、純粹に私的な門外不出の筈のものであるのに、それが公刊されたからと言って直ちに思想史研究の資料として採用するには、些かの躊躇いがある。なぜならこの場合は、人眼にふれず地上から姿を消して永遠に埋もれてしまうという運命を辿る多くの日記と、本質的には変わりが無いからである。この場合、公刊されるされないは、全くの偶然的なせしわざと言わざるをえない。その日記に何らかの価値があるか否かは、読者の判断に委ねられるのであり、他人の眼にふれなかつた日記の価値は、誰にも判定できないからである。

生前に公刊し、また死後の公刊を予定し、あるいは死後の公刊をやむを得ないことと覚悟している場合、日記は本人の手で加筆補訂され、整理されたりする機会をもつことが多いだろう。しかし公表が全く念頭になかつたにもかかわらず、始末するチャンスが逸したのがゆえに不本意にも公刊された場合、それが思想史研究の素材として適格性を有するか否かについて、十分な吟味が前提条件として必要とされよう。なぜならまず第一に、日記に通過のことだが、日記は発表された文章の論理的に練り上げられ、表現も推敲に推敲を重ねて読者に判り易く工夫を凝らしたものの完成度の高さには、到底及ばないからである。それは裏から言うと、断片的で、論理に飛躍や短絡が見受けられる例が多く、思想は未熟で、多分にアミーバの

如く未分化、不定形で、いわばカオスの様相を呈しがちだということである。

次に第二に、その記述内容には矛盾が多く、思想が安定性を欠き、優れた思想の閃めきと評価してもそれは一時的なものに止まり、以後に継続しない場合も多いからである。換言すると、その日その日の出来事や思索に触発され、一過性的な感情や思いつきをそのまま記すことも多く、全面的にかつ周到にあらゆる条件を検討し慎重に考えぬいて結論を下すなどという、時間的余裕がとれない場合が通例だからである。ましてや日記に向き合うのが、大抵の場合、一日の疲労の蓄積した就寝前のひとときだとしたら、日記に大幅な時間をさくのは、とても無理ということになる。更に第三に、それが青年期の日記の場合は、感情の起伏がとりわけ激しく、外界の刺激に左右されて思想の振幅も大きく、一定不変ということからはあまりにも遠いからである。

以上三つの理由よりして、本来公表を想定しなかった日記については、思想史研究の資料的価値は低く、あくまで補助資料、第二次資料として参考に資するにとどめ、主要な資料として用いるのは控えるのが穩当であろう。当人が全く公表を予想しなかった私的記録である、日記中の一時の感情に衝き動かされるままに記した不用意な片言隻句を以て、その人の思想の価値評価を決する根拠とするなどは、思想史研究としては邪道であり、論外と言う他はない。⁸⁾

日記がどこまで資料として利用できるかの要件についての検討をぬきにして、全ての資料を資料であるからとの単純な理由でひとなみに遇するのは、研究資料の選定という、研究者の最も基礎的訓練において不足していると言わざるを得ない。とはいえ、それでもなお日記を重要な資料に採用したのであれば、また研究方法上日

記の利用が重大な意義があると認めるのであれば、その日記の性格をふまえての十分な配慮と留保とが必要とされよう。

さて以上の日記一般の資料的価値の検討結果を、渾代英の日記にあってはめるとどうなるか。次にそれを見ておく必要がある。

第二節 『渾代英日記』の資料的価値

渾代英を知る人は、その回想文の中で必ずと言ってよいほど、彼の日記に言及する。それほど彼の日記は有名である。それは、彼の日記が周囲の親しい人々の間に公開され、共通の愛読書となっていたからである。彼の日記は彼という人物を理解し、その時々々の思想状況を知るために、彼の友人たちに自由な閲覧が許され、時として借り出して読むことも可能であった。⁹⁾ もし彼が留守でも訪ねて来た友人は、机の上に置かれた日記を読んでそのまま帰る場合もあったとい、彼の亡妻沈葆秀はそれを、「日記を以て友を会する」と称していたとい¹⁰⁾。また亡妻の妹沈葆英と再婚することになった時、彼は彼女に箱いっぱい¹¹⁾の日記を示し、暇な時に読むようにと言ったとい¹²⁾。

彼の友人余家菊は、渾代英が日常生活の上でなしたこと考えたことを一切包み隠すところなく赤裸々に記してある日記を見て、「公開の人格」と感嘆している。¹²⁾ 従って親しい人々に公開され自由な閲覧が許されている以上、それが公刊されるまでの距離はそんなに遠くはない。渾代英は中華大学学長陳時から編輯を付託された、『光華学報』第二年第二期の雑誌欄に、『愛瀾閣日記』と題して日記の一部を印刷している。¹³⁾ それゆえ彼の場合、折があれば日記を公表するに吝かでないとの用意があったものと見てよからう。

彼は一七年の日記の冒頭を『愛瀾閣自叙(続)』で飾り、更に毎

月の行事表、一年間の大事記、雑誌・書籍の購入一覧表（『書城新記』）、書信の往復録、家計簿等々の付録をつけて、そのまま一冊の書として通用できる体裁を備えさせている。また一九年の暮には、日記をつけ始めて以来十年間の、「惲代英年刊」が十冊の厚い書冊をなしたことを喜び、一九年の日記中の記事検索に便するための「備査」を作成している。これらのことは、彼が自己の日記を愛惜してやまないことを示している。と同時に、一七年十二月十六日の日記が語るように、独り占めにするのではなく、人々の公共の財産として多くの人々に読んでもらう価値があると考えていることを示している。

従ってこのように自己の日記を貴重なものと認めて大事にしている惲代英にとり、日記をつけることは彼の一日の時間割表の中でも重要な位置を占めており、大抵の場合、就寝前の一定の時間がそれに充てられていた。勿論、忙しさその他のために必ずしもそれが完全に守られるとはかぎらず、三、四日後にまとめて記されることも往々にして生じている。⁽¹⁵⁾ともあれ後日加筆して更に十分なものに仕上げる⁽¹⁵⁾こと、及び時にそれらをまとめて読み直すことも、彼にとり有意義な作業と位置づけられていた。⁽¹⁶⁾

さて以上よりして、惲代英の日記は彼の発表された作品と同等か、ないしはそれに準ずるものとの取り扱いが許されるものと見てよからう。そこには折にふれての思索が書きとめられ、また発表された作品の腹案や下書きも記されている。従ってなおカオスの色彩を完全には払拭しきれないものの、思想史研究の素材としての資料的価値は、決して発表された作品に遜色ありとする⁽¹⁶⁾ことはできない。

むしろ日記を分析の対象とすることを通じて、作品の背景や動機、作品の真実の意図を窺い知ることが可能にならう。また作品の醗酵

・発酵から完成に至るプロセスを跡づけることもできることにならう。そしてまた思想が日常の生活や行動を律する規範として生きてはたらくさまも、眼のあたりにすることができよう。それゆえ惲代英の日記は、彼の個人的な人間形成の現場証人として、また彼と彼を取り巻く五四時期の青年学生の思想と行動の実際の姿に接近する資料として、得難い材料と評価して過言ではなからう。

以上、惲代英の日記が思想史研究の主要資料として、十分に利用に耐え得ることを確認できた。これを踏まえた上で、更に彼の日記をつける目的・意図、言い換えると日記にいかなる効用を期待しているのかについて、分析を進めて行きたい。

第三節 日記の効用

さて日記を大切にし、日記をつけることに熱心であった惲代英は、周囲の親しい人々にも機会ある毎に日記を奨励し、「日記の仿行」⁽¹⁷⁾が広がっていることを非常に喜び、その度毎に日記に記している。

そして一八年夏に卒業した後、そのまま母校の附属中学部主任に就職して英語と修身の授業を担当しながら、生徒にも常に日記を勧めている。時には生徒に日記の習慣を促すため、また個々の生徒の生活・学習状況を把握するため、日記を提出させて読み、生徒の日記の一部を自己の日記の中に引用したりもしている。⁽¹⁸⁾そして遂に一九年の元旦には、日記をつけることを勧める文章をわざわざ印刷を頼み、年賀状として友人たちに配布してさえている。⁽¹⁹⁾また一九年の冬休みに友人や生徒たちに印刷して配った「寒假自省表」⁽²⁰⁾の中でも、その日課の点検項目の一つに日記をつけたか否かが挙げられている。

ところで惲代英はなぜこれ程までに日記に執心するのか。日記に彼はいったい何を期待しているのか。彼は一九年元旦の年賀状の中

で、日記の効用を三つ数え上げている。まずその第一は、自己を反省して、過ちを改めるよう自己を鞭撻することである。第二は、勉学や物事の処理によって会得した知識を確認して、万事に注意深い習慣を涵養して学業向上意欲を増進させることである。そして第三番目は文章の練習のチャンスになり、表現力が上達することである。

以上三つの効用はどれもいちいち尤もだとすることができ。これらは多分に、初めは母から勧められ²¹ざして明確な目的意識なしにつけ始めたとはいえ、十年間になんなんとする日記生活を通じて、彼自身が十分に実感として納得できたものであつたらう。そしてその効用を体験的に深く認識できたればこそ、彼は自己に日記を厳しく課し、その中断を責め悔やみ、他人にも執拗に日記をつけることを勧誘することになったにちがいない。

とはいえこの三つの効用のうち、憚代英自身がやはり最も重視し、彼に日記を書き続けさせた最も根本的な原動力は何であつたか。彼自身は日記の随所で次の如き発言を繰り返している。

私は日記から大きな益を受けてきた。近來私徳方面が甚だ退化した。……これは日記によって省察し教へ導くことがなかつたからに他ならぬ²²。

過ちがもし改められない場合は、必ず日記上で自ら責めよ。毎日毎日このようにすれば、たとい改めることができなくても、また恐れ憚かる心が生じるだらう²³。

従つて、彼が日記をつける目的は、主として人格の修養のためであつたことがわかる。換言すると憚代英にとり、日記は自己の毎日の言動を振り返り審査する反省記録であり、自己の道德的完成をめざしての不断の自己点検・評価の成績通知表としての効用が期待されていたのである。

ところで日記が日々の自己の思想と行動の記録である以上、そこにながしかの内省、後日への戒めや誓い、自らを励ます言葉や格言などが附随し揺曳するのは、極く一般的なことであらう。しかし、何らかの教育的効果を狙つての強制された日記ならいざ知らず、自発的な日記でありながら、品性の向上が日記をつける主たる動機であるというのは、些か堅苦しく感じられるかもしれない。だが、中国の日記の歴史から見ると、こうした例は枚挙にいとまがない程ありふれたものである²⁴。むしろ明代以降の中国の日記の主流をなしていると言つてよいほど、常套的、伝統的な日記のスタイルに他ならない。そしてお互いに励まし合つての修養の方が効果が高いことから、他人に見せることに心理的抵抗感はさして大きくない。中国の日記の中で、純然たる私生活の記録というものが見られにくい理由もここに存する。

それゆえ、憚代英の日記を中国の日記史上に置かならば、特に異とするに足りないばかりか、むしろその正統的日記観の延長線上に位置するものとも見ることができ。ところで近代中国人の日記で、人格の向上、道德的完成の修養に少しでも関心をもつ者が、その模範、よすがとして掲げるのは、主としてやはり伝統儒教の経書中の言葉、ないしは程朱・陸王学者の発言であつた。勿論、時代が下れば下がる程、また外国に留学したり外国語の習得者が増えれば増える程、西洋や日本の賢哲や偉人の格言が修養の資として登場する機会が多くなつて²⁵いる。

そして憚代英の日記とはほぼ同じ頃、つまり一九二〇年頃までの日記の中で、修養に役立つ書として必ずと言つてよいほど共通に推奨され言及される一群の文章がある。それは、曾国藩の日記や家書類、あるいは梁啓超の編纂した『德育鑑』（一九〇五年）、また王陽

明の全集などである。これは楊昌濟の場合⁽²⁶⁾、吳稚暉の場合⁽²⁷⁾、黃尊三の場合⁽²⁸⁾、宋教仁の場合⁽²⁹⁾、胡適の場合⁽³⁰⁾、林伯渠の場合⁽³¹⁾、曾琦の場合⁽³²⁾、謝覺哉の場合⁽³³⁾、すべてに当てはまる。そして言うまでもなく、惲代英の場合も例外ではなかった。

惲代英は一七年一月五日に『曾文正公』を三七頁分読み、同八日には『曾文正公家書』を読んでいる。ところでこれだけに終われば、彼の該博な読書量の一齣として放置しておいてよからう。ところが一八年六月十五日には曾國藩の日記である『求闕齋日記』道光二十年（一八四二）旧曆十月十四日の一部を書き写し、曾國藩が徒らに他人を誉めるのは、自他ともに欺き、「忠信」、「廉恥」を失うことだと戒めたのに、深く同感の意を表している。更に同二十七日には、登校して『求闕齋日記』を再度抜き書きしている⁽³⁴⁾。

また一七年三月二十九日に商務印書館への購入申込み予定書のリストに、『節本』明儒学案、『德育鑑』をあげ、一七年度の雑誌・書籍購入一覧表（『書城新記』）の中に、四月十九日に『德育鑑』を入手したとの記録を残している。更に一七年八月二十九日、YMC Aの廬山で開催した「夏令会」（サマー・カンファレンス）に参加して、クリスチャンの人格修養の方法を親しく見聞きする中で、自分たちは曾子の三省の方法を採用するとの決意を固め、その方が祈禱の効力よりも更に大きい可能性をもつことを指摘した。

そしてそれに続けて、「陽明は良知を致し、その徒の発憤有為は、頗るキリスト教に近い。いずれも一は上帝を待み、一は良心を待んでいる。余もまたはほ良知の説を採り、以て自ら成就したい」と述べている。また一九年一月四日には、「私は経訓の最も警策するもの、及び文天祥の『正氣の歌』、呂近溪（呂坤の父——後藤注）の『小兒語』を取り、熟読して暗唱したいと思う。暇な時、あるいは

道を行きなから頭の中で暗唱すれば、正面の修養に便するとともに、反面また妄念を防ぎ止めることができる」とも記している。そして一九年一月二十五日には、「寒^{ふやみ}假自省表」を作成し、その前文を採録している。これは前年の六月に、雑誌『青年進歩』一四冊に掲載された『二十世紀之学校児童健康十字軍』（ローズ・ウェストン・バル著）の方法を真似て編んでみた、「暑^{なつやみ}假自省表」をもとに手を加えて完成したものである。

そこには、「人と禽獸との區別、君子と小人との區別がどこにあるか考えてごらん。范純仁（范仲淹の次子——後藤注）は、『愧ずる心があつて生くるよりは、愧ずる心がなくて死するにしかず』と言っている。天を頂き地に立つ大丈夫は、どうして自ら禽獸や小人の境界に安んじようか。速やかに起て、速やかに起て」とか、「毎日程言書を読んで、常に本心を喚び起して鞭策を加えれば、自ら^{いひん}疏忽で怠惰になることはなく、その後には学問をなせば、定であることができ、静であることができ、安であることができ、よく得ることができ」などと記してある。そして更に『礼記』の内則、呂維祺（号は豫石）の言なども引用してある。

ところで以上のように、修養のモデルとして、見習うべきお手本として、儒教の経訓や先哲の発言を掲げたとしても、それで以て直ちに伝統思想の影響を一括してしまうのは、些か結論の急ぎ過ぎにならう。ともあれ、惲代英が曾國藩や王陽明らの修養に関する発言や実践に深い感銘を受け、それを自己の修養のたよりとして重視していたことを先ず確認しておこう。また彼は一七年十月八日の互助社結成の後、曾子の三省に倣って三省文を作り、毎日三回朗誦することを自らに課すとともに、弟の惲代賢にも勧めて実行させている。従って彼の修養法の中に、中国の伝統的な儒教の修養のあり方が色

濃く影を落しており、その一変種としての性格を免れないと見ることも可能である。

さてそこで問題は、憚代英の修養法は中国の先儒の修養法 of the コピー、再現と見なしてよいのか、ということである。言い換えると、時代の変化に伴って若干の新味が付け加わっているにせよ、本質的には大きな変化は見られず、伝統的修養法の枠を踏み出していないと評してよいのか、ということである。従ってこの問題を見極めるために、先ずその第一歩として、彼の日記に即してその修養の実際の模様を少し詳しく覗いてみよう。

第四節 憚代英の修養のありさま

さてまず憚代英の用いた日記の体裁、スタイルがどうなっているかを見ることから始めよう。彼は一九年から商務印書館発行の国民日記を使っている。しかしそれ以前は適当な市販のダイアリーが手に入らなかったために、白紙を買ってきて自分で線を引き、枠を拵え、自分で綴じて冊子に仕立てて使っている。³⁵日記中に見える、「日記を画して、二五二頁に至る」とか、「葆秀のために日記を画し、併びにこれを訂す」などの記録は、³⁶正しく年初の日記の作製・装幀の作業のことである。そしてその日記は、天気、起床・就寝の時間、³⁷智育、工作、体育、交際、遊戯、会聚などの欄を設けて簡単に一日の主要な行事の摘要を記し、そのあとに余白に自由にその日の出来事についての感想や友人との議論のありさま等々を書きこんでいる。一七年十月に互助社を結んで後は、七時に起床、八時から十二時まで学課、一時から四時まで作文、五時は雑書の閲覧、六時半に互助社の会議、七時半から八時半までは予習ならびに手紙書き、八時半以後は日記など、の日課表を作っている。そして互助社の仲間も

各々日程を定め、お互いにそれを遵守し、守れないときは報告することに決めている。³⁷ところがそれを決めた日の互助社の会議が六時四十五分から八時までかかっているように、決定の実行は容易ではなく、十月の末頃からは、「日程の情形」³⁸や、徳育、自省、「人を助ける」などの点検項目が新たに付け加わっている。

そして更に十一月六日には、煩雑になった項目欄を整理すると同時に、一日の行いについて詳細に時間を記録するようになっていく。そして「任意に日程を更改す」ということも、徳育の欄で反省の対象にあげられ、日程の遵守にひたすら努力を傾けている。ついには十二月二十二日、「修養」について自己採点を行うことを決め、以後毎日、日程と修養とについて各々百点満点で別々に採点することになっている。そして互助社の仲間のあいだで、自分の定めた時間通り起床できない時は罰金十文を自主申告し、貯ったら皆で撮る写真代に充てることが決まった³⁹際に、憚代英は自分独自の懲罰規定を作り、早速実行に移している。

しかしこうした厳格な自己審査は長続きすることは難しく、互助社の緊張した空気が次第に弛んできた。翌一八年二月十八日、憚代英は徳育の欄で、「今日の情形は益々悪化し、時間に注意しないばかりか、日程を装飾品と見なしている。早起きの習慣は疾うにくずれ、日程と修養の点数は日々下降の勢いにある。将来学校を出たらどうして自立したらよいのか」と、痛烈に自己批判している。そして互助社の立て直しに着手すると同時に、またもや日程を改訂して、日程の項目毎にプラス何点、マイナス何点をつけ始めた。

しかしその矢先、妻が難産のため、生まれたばかりの嬰兒ともども死亡するという悲しい事件が起こっている。だが、葬儀その他の後始末が一段落した三月十三日には、気を取り直して日程を定め、

以後、その精密にして厳格な実行が再開している。日程は二十二日にまたもや改訂しているが、一日の時間を十に区分して、その各々に十点を配して採点を行い、更に一日の行動の中で特に守れなかったものを総点の中から引いて、その日の実際の得点を計算するといふやり方に変えている。更には翌日の予定も立て、予定通りに運ばなかったらまた点を引いている。

マイナス点をつける理由は、朝寝坊から始まって、夜更かし、不清潔、妄想、乱夢、非時の閑食、飲茶、時間を無駄にする、疏忽とか、軽薄な口吻、信頼を損う、他人を綽名で呼ぶ、無益なおしゃべり、他人の話している最中に口をはさむ等々、その数はかぎり無く多い。恰もわざと点を引くために、自己の言動に苛酷なまでの眼差しを注いでいるかのように見受けられる。そして更には一週間の総点を集計して平均点を算出したり、また流石に日曜日には採点をやめているが、二週間の平均点を出したりもしている。こうした常規を逸したとまで見える自己の日程の遵守や言動への厳しい点検は、大学卒業を間近にした六月二〇日すぎまで続いている。そして四月末から五月にかけては、余家菊と相談して『淑身日覧』を作成し、また日記の上端に格言を書きつけて自戒の具としている。

ところで一八年上半期の何かに取り憑かれたかのような異常なまでの採点作業への熱中の裏には、こうまでして自己をがんじがらめに縛り上げなければ、亡妻への思慕と、自己の配慮の足りなさから妻を死に追いやったとする自責の念とを、封じ込める手だてがなかったことが読み取れる。従ってこの自虐的とも見える反省魔的行為は、むしろ彼の押えつけても押えきれない妻の死の悲しみを紛らわすためのものであり、悲壮感さえ漂わせている。と同時に、家庭内の紛糾に幼い胸を痛めて精神を病み廃人となった兄の二の舞いを慎

れ案ずる、父親をはじめ周囲の人々の危惧を晴らし安心させるための彼の必死の努力であったとも見ることができ⁴⁰。

そして一八年七月半ばで日記が中断して以後、一九年に入ると、妻の死の悲しみも諦めがつき落ち着いてきたのか、また学生時代とちがい中学部主任としての日々の多忙な日課のせいか、日記は嘗ての過激さがうすらいでいる。とは言うものの、日程の上における起床・就寝時間のチェック、及び自省、「人を助ける」等の項目における自己点検・反省の厳しさにおいて、基本的に変わりはない。ただ自らの修養に励むとともに、教師としての立場から、年若い少年たちの品性の向上、人格の完成を促すことにも意を注ぐようになっている。受持ちのクラスの生徒たちに日記を課してそれを閲読するのも、その一つであった。そのほか、一日に何時間勉強したかに始まり、日記をつけたかに終わる十四の点検項目を並べて、それがどの程度実行できたかを毎日自分で記入する、「寒假自省表⁽¹⁾」の配布もその一つであった。

さて以上が、日記に即して概観した惲代英の修養の実際のありさまである。そして先述したように、問題は彼の修養の方法が、中国の伝統儒教の修養法の純然たるコピー、再現であるか否かを見極めることであった。従って惲代英の修養のあり方と対比して見るために、惲代英をも含む一九二〇年頃までの人々が修養の範と仰いだ、修養の最も典型的で最も徹底した姿を示していると認められる曾国藩の日記を瞥見してみよう。ところで惲代英のプラス、マイナスの精密な採点に接して、明代以降中国の民衆の中に行われた、通俗道教の功過格が想起されるかもしれない。だとすると惲代英の修養のあり方は、伝統儒教のそれとつき合わせるだけでなく、通俗道教をも視野におさめて眺める必要があることになる。従って本稿の論の

展開の中で、この点についても何らかの回答を迫られることになるであろう。

第五節 曾国藩の修養のありさま

さて、周知のように曾国藩は道光十九年（一八三九）旧暦元旦の二十七歳の時から、同治十一年（一八七二）旧暦二月三日、即ち六十一歳で死去するその前日までの、三十有余年にわたる日記を残している。辛卯の年（一八三一）より滌生と改号し、経世の大志と道徳的完成の大望とを抱いていた彼が、目的意識的に理学の徒をめざし始めたのは、翰林院での京官生活を送っていた道光二〇年頃からである。道光二十一年七月に『朱子全書』を購入して披読し始めた彼は、かねてより厳しい修養の噂を聞いていた同郷の先輩唐鑑を訪問し、「檢身の要、読書の法」を質した。唐鑑は朱子の全集を中心に、毎日の日課を定めて熟読玩味し、実践躬行するよう説いた。そして、倭仁がその実践において最も篤実であり、毎日朝から就寝するまで一切の言動を全て記録し、心中の私欲の克服できなかつたこと、及び外面に現れた言動の逸脱して取り締まることができなかつたことを逐一書き出していることを教えてくれた。

道光二十二年十月、曾国藩は倭仁に面会し教えを乞うた。倭仁は「研幾の工夫」が最も大事であり、善悪がまだ明瞭な形をとらないう心の動きを微細なうちに見定めて対処し、不善への動きを防いで正しい方向に導くよう戒めた。また「人心の善悪の幾は、国家治乱の幾と相通ず」とも論してくれた。そして時をおかず直ちに自己に課す毎日の規則を作成するよう勧められた。以後、彼は呉廷棟、馮卓懷、陳岱雲らの「良友」たちと互いに励まし合い批判しあいつつ、倭仁や唐鑑の教えてくれた方法の忠実な実践に渾身の努力を傾注し

て行く。友人たちと日記を見せ合い互いに点検し忠告しあうと同時に、倭仁の日記も読ませてもらった。また倭仁や唐鑑に日記の検閲を乞い、倭仁からは日記の上端に評語や激励の言葉を書いてもらっている。

しかし彼の真剣な修養、自己点検の生活は、彼の心身を非常なストレスにさらすことになった。不眠、眩暈のほかに、道光二十三年正月には吐血するなどの肉体の不調に悩まされながらも、なお自らを叱咤激励して修養を続けていたが、同三月の初め頃で潮がひいた如くにおさまっている。もともと頑健には程遠い彼の体質にとり、毎日の峻烈をきわめた修養が、逆に父母からもらった肉体を損なうという最大の不孝を帰結したことほど、大きな衝撃はなかつたと言える。更に共に助け合つてこの数カ月を修養に没頭していた友人の陳岱雲が、六月には一時は生死も危ぶまれる重病にかかつたことも、倭仁や唐鑑の教えてくれた修養の方法に醒めた対応をとらせることになった。彼はそれがいかに自分に不適合で、いかに心身に無理を強いるものであるかを痛切に思い知り、それに見切りをつけて、方向転換するに至っている。

ところで、彼が自らの心身に甚大な負担を強いて自分に課した修養の日課とは、一体具体的にどのようなものなつとめであったのか。彼は道光二十二年旧暦十二月七日の日記の中で、「これより謹みて課程を立て、新たに換りて人となり、禽獸となるなからん」と述べ、自らに課した修養の義務を列挙している。そこには合計十二項目ならべられているが、同十二月二十日付の『澄弟温弟沅弟季弟に致す』の家書の中では、毎日きちんとした楷書で日記をつけ、その日の身過・心過・口過を全て記録するというのが付け加えられて、十三項目に増えている。

さてその課程の先ず第一は「敬」である。それは嘗て唐鑑が教えしてくれた、外面の言動を監督・管理する「整齊嚴肅」と、内面の緊張を保持する「主一無適」とに他ならず、朝日の如く純潔で新鮮発潤な柔軟さを常に保つことである。第二は「静坐」である。毎日、いつと定めず小一時間ばかり静坐をする。しかしその静坐は、禅仏教の入定の如く外界を謝絶して死灰の如く無関心になることではなく、静の極致において未発の中、寂然不動の体を保持し、一陽来復の仁心を得ることに他ならない。とはいえ香を焚いて静坐に耽っているうちに居眠りすることが多く、しきりに慨嘆し猛省している。第三は早起きであり、黎明とともに起床し、暖い布団に未練を残さないことである。これも守れないことが多く、口惜しがることしきりであるが、これについては後でもう一度ふれることにしたい。

第四は「読書不二」、つまり一冊の書に専念し、他書を平行して読むことを戒めたものである。第五は歴史書を読むことである。父親の資金援助を得て購入が叶った二十三史を、一日一〇頁ずつ点を切るといふノルマを自分に課している。第六は言葉を謹むということである。彼は友人から真先に自戒すべきこととして「慢」を指摘されている。つい慢心して友人を嘲弄したりは終生さけられなかつたとみえ、後に自分の日記を「無慢室日記」と名づけている。第七は「養氣」である。丹田に気を蔵して、驕氣や矜氣を一掃して虚心坦懐に他人と向き合うよう努めることである。曾國藩は心が浮ついて散漫になり集中できないことを苦にして、十月の初め、『孟子』公孫丑上篇の「浩然の氣を養ふ」の箇所を何度も朗誦して自らを督励している。

さて第八は「身を保つ」であり、父の訓戒に従って、「勞を節し、欲を節し、飲食を節し」て、常に養生につとめて病氣にかからない

よう注意することである。それゆえ修養にのめり込んで健康を害したことは、取り返しつかない過失と見なされたことは、容易に見当がつく。倭仁や唐鑑の教える修養の方法は、父の命に背く親不孝の所業であり、「父母の遺体」を傷つける逆療法に他ならなかった。従って彼は熱病にかかれていた如き修養への熱中から現実を引き戻され、倭仁や唐鑑に対しても距離をおいた交際ができるようになったのである。第九は「日日に亡ふところを知れ」であり、つまり毎日会得したことを二つずつ『茶余偶談』の中に書きつけることであり、一種の心覚えの随想録を編むことである。

第十は「月に能くするところを忘るるなかれ」であり、毎月詩文を数首作って、自己の窮理の多寡、養氣の成否を驗証することである。ただ唐鑑から、「詩・文・詞・曲は、みな必ずしも用功せざるべし、誠に能く力を義理の学に用ひれば、彼の小技も難しとするところに非ず」と、くれぐれも意見されていた。しかし生来の文学愛好癖は止められず、何とか修養に有益との理由をつけてこの項目を残しているが、「一味耽着すべからず、最も心を溺らせ志を喪はせ易し」と、用心深くブレーキをかけている。第十一は習字であり、筆墨の応酬は自己の課業であるとの位置づけの下に、毎日朝食後の一時間をそれに充てている。さて最後の第十二は、「夜、門を出でず」であり、日課を狂わし精神の疲労を招く夜遊びを戒めている。

さて以上の修養の日課が、道光二十二年十月から翌年三月頃までは五カ月余り、曾國藩が自己を鞭打って督励したものであった。そのリゴリスティックな要求と、毎日のように繰り返される激しい後悔と反省の吐露とは、惲代英の日程・修養について、採点を自己目的化したかの如き観を呈した極端さと、好一對をなしていると言つてよからう。ところでこうした修養のあり方の外見上の相似性は、

それはそれとして注目し値することである。先述の通俗道教の民衆教化の功過格とも関連させて、中国の伝統的思想・文化状況の中における修養のあり方の問題として、いずれは論及せねばならないことである。

しかし当面の問題は、憚代英の修養が、伝統儒教のその全くのコピー、再現であるか否かを見極めることであった。曾國藩の修養のありさまを見たのは、その問題解明の手続きとしての必要性からであった。それゆえ引き続きこの問題を追究するためには、修養のめざす方向性、修養の目標、修養の彼方にもたらされる理想の人間像が、曾國藩と憚代英において一致しているのか否かを確かめておく必要がある。従ってその検討に移ることにしたい。

第六節 修養の目標と目的

さて曾國藩の場合、唐鑑から朱子の全集を専ら読み、実践躬行するよう教えられて修養生活を開始したのに見られる如く、その修養のめざす目標は朱子学的聖賢に他ならなかった。その修養方法の「敬」、「静坐」、「養氣」等々は、伝統儒教の氣質変化の方法をそのまま踏襲したものであり、そこに何らの新味が付け加わっているわけではない。しかも私徳の重視も、「己れを修める」は「人を治める」に連動しており、あくまで皇帝の命令下に官として民に臨む、士大夫読書人としての職務の遂行を助けるために他ならなかった。

言い換えると、修養によって聖賢の域に達するのは、個人としての品性や人格の向上を自己目的として、それで完結するのではない。聖賢になることを通じて、天下を治世に導く政治家としての使命が十全に果すことが可能になるからである。従って宋学以来の「聖人学んで至るべし」のスローガンは、その裏面に経世意識、士大夫意

識を潜ませているのであり、一般民衆に直ちに聖人になる可能性を開放したわけではない。

さて以上のように曾國藩の場合、修養の目標は聖賢であり、しかもその目標の達成は、天子を補佐して政治を行う十分な資格を獲得するとう、直接的、功利的目的に奉仕するという構造を取る。ところが憚代英の場合、同じく私徳を重視するにしても、修養の目標は聖賢になることではない。まして民衆の上に立って天下を治める目的のためではない。従って、善行を積むことにより現世の利益や幸福を得たり、また子孫に余慶を残して繁栄を招くなどの、功過格的功利主義とも全く無縁であった。

憚代英の場合、道徳的完成、品性の向上それ自体が目的であり、直接的、功利的目的をもたない。もし強いて言うならば、修養の目標が実現されることにより、「風俗」が正され、その結果、救国が達成されることが目的だと言つてよからう。⁽⁴⁵⁾しかしそれは目的というよりむしろ結果であり、遥かに遠い射程距離の彼方にある。

ところで憚代英の修養のめざすべき人間像は何か。それは明示的に述べられていず、まだ幾多の古い道徳主義的夾雜物をくっつけており、しかと把握しにくいけれども、彼が確かに修養の目標をイメージしていたことについては疑い得ない。従って日記中の反省事項を手がかりに、まず大まかな見通しをつけておこう。

例えば信頼を損う、軽薄な口吻とかは、いつの時代、どこの社会にあっても悪徳と見なされる、極く当然の社会人としての他との交際のモラル、ルール、エチケットに対する違反と見ることができ。更に不清潔、茶を飲みすぎる、非時の閑食などは、道徳の範囲に属するというよりは、むしろ衛生や健康上の常識に属することであろう。そして朝寝坊、夜更かし、時間の浪費等々は、能率的、科学的、

合理的な生活態度に関わる問題であり、いわゆる良き生活習慣、マナー、規律といった次元のこととして解すべきことであろう。

ところで曾国藩、惲代英両者ともに非常に重視し、しかも容易には実行できず、たえず反省を繰り返しているのは起床時間の問題である。曾国藩は寝過ぎた時の日記に、「恨むべし」、「真に人を成さず」、「絶えて警惧の意なし」などと、自己を恥じ叱責している。⁽⁴⁶⁾惲代英も同様で、日程通り起床できなかった時は何分寝過ぎたかを克明に記して、その時間数に応じて日程分の点数から差し引いている。「このように因循するのは、真に人となるのに愧かしい」などと記し、それを過失ではなくて明白な罪悪だと述べている。⁽⁴⁷⁾

さて曾国藩が早起きに価値を認め、朝寝坊を強く非難するのは、まず第一に、それが祖父曾玉屏の遺訓で、曾家の家風として遵守すべき事柄だったからである。祖父は農村に居住する地主として、土地の開墾や家畜の飼育に知恵と工夫をこらし、率先して精励するという生活態度を貫くこと⁽⁴⁸⁾によって、曾家の田地を増やし、安定した生活基盤を子孫に残した。曾国藩は祖父の生活ぶりを模範として継承して行くことが、地主としての経済的地位や生活水準を維持するための必須不可欠の条件と堅く信じていた。それゆえ朝寝坊するということは、怠惰で安逸な奢侈の気風に染まり、いつしか自己の堅実な地主経営の努力と生活習慣を忘れ去って、破産への方向に歩み出すこととして、由々しき問題と見なされていた。湖南の山間の農家に生まれ、祖父の背を見つつ成人した彼の、故郷と臍の緒が切れない質実さ、純朴だが土臭い頑固な農村地主気質⁽⁴⁹⁾がそこに流れていると見てよい。そして黎明とともに起きることを重視する第二の理由は、彼の日課の「養気」との関係があった。「夜気」によって浄化された「平旦の気」を自己の体内に吸入することにより、自

己の心の鎮静化、徳性の涵養に役立つと信じていたからである。⁽⁵⁰⁾

ところで惲代英が起床時間の厳守に神経質であった理由は、寢床の心地良さに恋々として、学校にいつも遅刻して先生や学友から責められるという不始末をしでかしながら、それをなかなか改められない自己の意志の弱さへの恥かしさ、口惜しさのゆえであった。「つねに晨に醒めてまだ起きず、好んで床席^{ベツド}に沾恋して、一毫の決心毅力の自分に衣を披^ひきただちに起させることができるものがない」、「吾の志力、どうして遂に自ら甘んじて晏^{おそ}く起きるの魔王の麾下に降伏するの⁽⁵¹⁾」等々の大袈裟な概嘆・自責の語は、朝きちんと起きられるか否かが、これから世の中に巣立っていく青年としての彼のプライド、自信に関わるものであったからだと見られる。従って朝寝坊は、彼の意志薄弱ぶりを白日の下にさらす悪徳として、彼の最大の弱点として意識されていたのであり、だからこそ躍起となってその克服を誓うのである。

勿論、朝遅いのは夜半ついで興に乗り、読書や文章の作成で夜更かしすることが多いからである。それゆえ就寝時間も厳しい点検の対象となっている。また日記中でも反省してやまない「妄想」に耽り、面白いアイデアを寝転んで思い巡らすことも多いからであった。そして更には彼の体質的素因もあつたらう。

ともあれこの問題は、青年期、とりわけ学生時代にありがちな生活習慣、スタイルの問題に他ならなかった。そして社会人としての生活が始まれば、否応なしに規律ある生活習慣が身につくのが通常であり、モラトリアム時期の一時的・一過性的現象にすぎないことは、惲代英の場合も例外ではなかったと見てよい。⁽⁵²⁾

以上双方が執拗にこだわる起床時間の問題をも含めて、曾国藩の修養と惲代英のそれとは取り組みの真剣さという外見はよく似てい

る。が、その修養の目標、めざすべき方向性において、全く接点を見出せない異質なものであることは、ほぼ見当がついたとしてよからう。従って、憚代英の修養を伝統儒教の純然たるコピー、再現とする見方は成り立たないとしてよい。憚代英の日記は、例えばほぼ同時期に日本人で彼より四、五歳年少であった中学生大宅壯一がつけていた日記との間の方に、むしろより親近性をもつと言える⁽³³⁾。それは、自我にめざめた青年期特有の自尊心、自己を厳しく見つめる潔癖さ、純粹でひたむきな向上心、自由と真理と正義を求める率直でとらわれない初々しさ等といった、心理的特徴をあますところなく反映していると見てよからう。

ところで同じく道徳的修養をめざし、曾国藩や明儒にその模範の一部を仰ぐことがあったとはいえ、憚代英の理想とする人間像の新しさは、一体何に由来し、何を意味しているのか。言うまでもなくその大きな要因の一つは、彼が成長し勉学を続けてきた武昌の地の特殊な地理的・経済的・政治的・歴史的・文化的環境諸条件にある⁽³⁴⁾。だがこの問題は余りにも大きく、筆者の手に余る。とはいえ、序章で本稿の課題の一つに、五四時期の憚代英の思想と行動のユニークさをもたらしたものについての見直しをつけることをあげた以上、いきおい言及すべき時が来よう。それはその時として、憚代英の修養の新しい性格の由来について、筆者の推理したところを述べてみたい。そしてそれを通じて、彼が浸まじいばかりのエネルギーを集注した修養の目標を見極め、その新しさの歴史的 성격・意味に迫りたいと考える。このことは、武昌互助社の、五四時期の他の青年学生の諸団体とは異なった特徴を見定める上にも、当然大きく寄与するにちがいあるまい。

第七節 憚代英の修養の歴史的 성격

さて一七年十月の武昌互助社の成立にこぎつけるまで、さまざまな組織プランが提案され、その殆どが現実化しないうちに消えてしまった。が、その中で最も早く提起され、動き出したところで互助社に交代した組織がある。それは一七年一月に憚代英が呼びかけた Our Club (我們的俱樂部) である。それは、俗っぽくなく哲学的であること、贅沢をせず経済的であること、筋道にもとらず科学的であることの、三つの宗旨の下に六名の会員を擁し、友誼を固め皆でリレーションを行う同人団体である。八月十九日に第一回の会合を開き、その後すぐに憚代英がそのメンバーの一人梁紹文と YMCA のサマー・カンファレンスに参加して互助社結成のヒントを与えられて、この我々のクラブは互助社に移行して自然消滅した。

だが互助社の仲間とともに一九二〇年初めに利群書社を開店した後、『我們的』と題する内輪で読む謄写版刷りの小型雑誌が三回発行されており、我々のクラブの名残りが後を引いていることをうかがわせている。ところでこの Our Club なる名称は一体どこから思いついたのか。なぜわざわざ英語で表記したのか。ところで Our Club なる名称で歴史的に有名なものは、ベンジャミン・フランクリンが一七二七年に、相互の向上を図るために優れた知人たちを集めて作ったクラブである。それは一名 The Junto (スペイン語で秘密結社を意味する) とも称し、以後フィラデルフィアで四十年以上も続き、その地方きつての哲学・道徳・政治の学校となっている⁽³⁵⁾。そこでもし、憚代英の Our Club がフランクリンのそれから何らかの示唆を受け、その思想的影響の下に生まれたとしたら、彼はそれをどういうルートで入手したかということである。

フランクリンが中国に紹介され受容された歴史について、詳しく調査した先行業績があるかどうかは、筆者は寡聞にして知らない。だがフランクリンの自伝が、中国の定期刊行物に訳載されたのは、管見の及ぶかぎり、『清華週刊』五六期から五八期、一五年十一月二十日から十二月八日の三回掲載分である。五九期には同じ訳者「渠」の名前でフランクリン格言選録が載っている。自伝が全訳か抄訳かは今のところ確認できていない。『新青年』一卷五号（一六年一月十五日）には、劉叔稚の英漢対訳のフランクリン自伝が掲載されている。しかしこれは自伝の最初の部分、即ち八歳のときラテデルフィアに入学してから、兄と喧嘩して船に乗って逃げ出しフィラデルフィアに到着して最初の一夜を過ごしたところまでである。その他、『晨报』一七年十二月五日号にフランクリンの逸話が載っているが、これは彼の結婚にまつわるエピソードにすぎない。

さて惲代英の日記にフランクリンの名前が見えるのは、都合二回である。一つは、一七年の日記に附せられた中西名辞対照表である。そこで惲代英は、佛蘭克林、Benjamin Franklinとして、生卒年、国籍を記入し、事跡の欄に、「新聞に広告、投書欄、挿絵を載せることを提唱し、避雷針を發明した」ことをあげている。そこには佛蘭克林以外の中国訳名がある場合はそれを記入する欄も設けられているが、空白になっている。ということは、『清華週刊』の訳名福蘭克林については、惲代英は知らなかったことになる。また『晨报』の訳名弗蘭克林も知らなかったことになる。更に林伯渠の一九一四年九月三十日の日記に付してある泰西格言の中の佛蘭克林の一条の訳名も、全く無関係である。『新青年』の劉叔稚の訳名のみが一致するが、先述の如くその対訳は自伝の極く一部分で、惲代英が事跡の欄にあげたことは、まだ出て来ていない。

従って一七年の時点で見るかぎり、惲代英はフランクリン自伝の原文を入手して読んだか、または日本語文献などのソースによったかとしか考えられない。そして惲代英の英語の実力から見て、また Our Club などと特に英語で表記している事実から見て、原文を読んでいたと見るのが、最もありそうなことに見える。しかしこれはまだ臆測の段階にすぎず、直ちに結論とするには、まだ多くの検討すべき問題が残されている。それゆえこのことは、もう少し先送りしておく。

さてもう一回フランクリンの名が惲代英の日記に出現するのは、一九一一年一月六日である。ここでは「佛蘭克林曰く」と、その言葉を用いて反論している。この発言の出所は不明だが、あるいは彼が一七年十月二十六、七日の両日にわたり翻訳に従事した、『泰西格言録』から拾い出したのかも知れない。あるいはまた、一九一一年に入って商務印書館発行の『少年叢書』の一冊として出版された『富蘭克林』⁵⁶に依拠したのかも知れない。その内容の詳細は不明だが、もし自伝だとすると四二頁という量から見て、全訳だとはとても考えられない。二一年十一月四日の謝覺哉の日記に、「富蘭克林が自らに課した十三条」として十三徳があげられているが、これが明らかに『少年叢書』によっていることは、訳名から推測がつく。

さて惲代英がフランクリンの思想的影響を受けているか否かを確かめるために、次にフランクリンの自伝の記述と、惲代英や互助社の人々の行動との間に関連するものがないかどうか、思想的影響関係をうかがわせるものがないかどうかを見てみよう。一八年六月二日、惲代英は互助社の仲間と協議して、中華大学の教員応接室に各人の書籍を持ち寄り、他の学生たちにも公開して、貸し出しもする図書室の設置を決め、早速本集めと目録作りに取りかかった。この

「啓智図書室」のアイデアは、我々のクラブの会員の本を持ち寄り、共同図書館を作ることを提案し、後の北米各地の会員制貸出し図書館の基礎を築いたフランクリンのそれと相関連するものはないであろうか。

次に、互助社は人数が多すぎると運営上不都合が生ずるため、一つのグループは四人を限度とし、次々に枝分かれして組織を広げていくというやり方を採用している。新入会員は必ずその人を熟知している旧会員とグループを作る、あるいは別に新しいグループを結成してそこに旧会員を一名派遣して援助するなどの、当時の青年学生その他の団体に類を見ないユニークな組織化の方法である。そして更に一八年に入ると、各々のメンバーが独自に友人を集めて、輔仁社、黄社、仁社、為我社、日新社、健学会、人社、誠社などの類似の小団体を次々に結び、蜘蛛の網の目のように、組織の輪を縦横に張りめぐらして行った。

そしてこうした組織化の方法について、憚代英自身は一九年九月二十七日の日記の中で次のように述べている。

私は常に言っている、我々の団体の拡張は、自分を太陽系とし、その周囲の人々を惑星にさせ、その惑星のまわりの人々を衛星にさせるよう望むべきである、——それだけではなく、惑星をみな進んで太陽系にさせ、衛星をみな発展して惑星にならせ、今度は自分自身をその衛星にならせるよう望むべきである。このように回転し促して行けば、必ずや国内に多くの太陽系を生み出させることになり、その時はじめて「百足の虫は、死すまで僵れず」ということになる。我々は必ず一つの太陽系にだけ頼りかかるべきではない。朝鮮に一人の安重根がいても、やはり国の亡ぶのは救いきれない。だから我々は一人一人が自

分を励まして太陽系にならねばならない。

そしてこうした組織の広げ方についても、フランクリンの我々のクラブと同様な規則をもつ従属クラブを、会員がめいめい創設することにとめるというやり方から、有力なヒントを与えられたと見ることができないだろうか。

第三は、一八年五月、YMCAより借覧した『完人之範』を真似て修身日覧法の作成を思い立ち、余家菊との相談の上、憚代英は『淑身日覧』を編んでいる。これは一般の少年の自覚を促すために、格言や賢哲の言論を集めたもので、日々に人を感動させて、人格向上を励ます用に立てるものであった。そして五月二十八日に友人が、「私たちは格言日暦を作って、售罄すべきである」と述べたことを記し、「そのやり方は甚だ佳い」と評している。そしてこの一般の少年向けの修身日覧や格言つき日めくり暦についても、フランクリンの「貧しいリチャードの暦」を想起させないだろうか。フランクリンはこれを、他の書物など殆ど買って読むことのない一般市民の間に、教訓を伝える絶好の手段として思いつき、二十五年間ものロング・セラーとして多くの民衆の間に広く流布している。

第四は、憚代英の日程を定めてその遵守を自己に課し、実行できたか否かを毎日厳しく点検して採点する例のやり方である。道徳的完成の望みを抱いたフランクリンは、十三の徳目を自己に課して、小さな手帳に線を引いて徳目点検表を作り、毎日その各々について犯した過失の数を黒点で記入するというやり方で成績を出している。とりわけ第三番目の「規律」に自己の最大の弱点を見てとった彼は、一日の二十四時間をどう使うかを定めた時間割表を作成し、克明にチェックしている。この十三の徳目の実践についての毎日の自己点検、そして一日の時間割について特に取り上げて神経質に対処する

フランクリンの修養のやり方は、惲代英のそれと余りにも似ていないだろうか。

明代以降の通俗道教の功過格は、プラス、マイナスの採点の方式において、惲代英にながしかの影響、ヒントを与えたことは十分に考えられる。しかし、その点検項目の内容と方向性、及び修養の目的において、惲代英と遙かに隔たっていると云わざるを得ない。⁵⁷⁾むしろ、他の徳目もさることながら、とりわけ「規律」を最重視し、「時間を決めて仕事をなすべし」として日程の遵守を細かく点検するフランクリンとの間の距離の方がより近いと言うことができはしないか。

第五は、惲代英が、日記とともに家計簿をつけるという習慣を自己に課していることである。一七年の日記には、「家用全年統計」の収支決算簿、及び「家用決算備査」の毎月項目毎の支出簿を付している。また任地にいる父親に詳細な家計の報告書を書き送っている。このこともまた、フランクリンの几帳面な会計報告を高く評価する自伝中の言葉と相通ずるものがありはしないだろうか。

第六は、惲代英の合理的な生活態度である。彼は簡素で節儉な生活にあこがれ、無用の贅沢、華美を嫌うことを日記中に度々記している。しかしこれは単なる吝嗇、守銭奴といったものではなく、一九年の年賀状の印刷にも見られる如く、必要で理にかなったと認める支出には、惜しみなく金銭を投じている。そして一七年の日記に付せられた上海の洋書取次店伊文思公司との往復書簡は、彼の合理的な金銭感覚を生き生きと伝えてくれる。ことは本屋と買い手との間にまま起こりがちな取引ぎ上のトラブルである。惲代英は予約購読雑誌の送り状が実際に届いた号数と異なっていること、及び販売書目中には外国から中国までの郵送費は不要と書いてあり、以前に購入

したものについてはその通りであったのに、今回注文のものについては請求していること、国内郵送費が今回に限って高く請求されていること、以上の三点について再調査を要求している。その際に彼は、「事は営業の信用に関わるので、貴公司はきつと面倒なことも考えないでしょう」と、自己の基本姿勢を明確にしている。このことも、フランクリンの節儉と正直と誠実とを特に重視する態度を彷彿とさせないであろうか。

さて以上六点にわたり、惲代英の日記中の行動に、フランクリンとの思想的関連性、類似性が見られることを指摘してきた。しかしその大部分は思想的影響というよりは偶然の一致に類し、筆者の並べた証拠は単なる状況証拠と一蹴されるかも知れない。

だが惲代英が欧米の書籍・雑誌に常に注意を怠らず、伊文思公司や丸善書店の目録を見ては発注して取寄せていた事実がある。そして、主として健康や衛生に関する科学常識を説く啓蒙的な英語の文章を翻訳して、『東方雜誌』や『青年進歩』や『婦女雜誌』に多数掲載しているという事実もある。日記も英文で記すこともあり、大学卒業後は中学部で英語の教科を担当し、またYMCAのサマー・カンファレンスでは宣教師たちと英語で会話をしており、また英語で手紙のやり取りもしている。また英語で投稿もしている。更に一七年七月には、トーマス・モアの『ユートピア』を一週間位で読み上げており、二一年には『新青年叢書』の一冊として、カール・カウツキーの『エルフルト綱領解説』の第五章『ザ・クラススツラグル』を翻訳して出版している。

以上より見て、当時の中国の青年学生の中にあつて、惲代英の英語力が抜きん出て高かったことがわかる。また大学ではドイツ語も学んでおり、日本語の書籍も一七年の『書城新記』に見るかぎり、

相当冊数購入しており、眼を通していたことは間違いない。

それゆえ彼が、一七年一月の「我們的倶楽部」の発起より前に、つまり彼の日記が現存していない一六年十二月以前に、フランクリンの自伝を入手して原文で読んでいた蓋然性はそんなに低くはないと見られる。よしんば原文で読んでいなかったとしても、日本語で読んでいた可能性も否定できない。ただ惜しむらくは、一六年十二月以前の日記が失われていて、確証があげられないことである。

とはいえ、たとい百歩譲って偶然の一致だとしても、それはそれで意味がある。なぜなら、双方が非常に似ているということが否定されたわけではないからである。憚代英とフランクリンの双方の道徳的完成をめざしての修養の底に共通に流れるもの、それは、自己の日常生活に不断の厳しい自己審査を施し、自己の生活を自らの計画の下に統制・管理して、生活の方法的合理化を図らんとする倫理的生活態度に他ならないとしてよからう。

従って憚代英の人格の向上をめざしての修養と、秩序正しい規律ある生活の確立のための日程の遵守との、両方面における自己への厳しい要求と不断の自己点検との成績報告書である日記に着目するかぎり、そこに近代的性格が顔を覗かせていると評価して差支えなからう。マックス・ウェーバーの言を借用すれば、市民的、資本主義的な合理的生活意識、エートスがうかがわれるということである⁽⁶⁾。そして筆者の、憚代英の日記のどちらかと言うと形式面、外表面よりする分析を通じて得られたこの見通しが、果して日記中の彼の思想と行動の全般に貫かれるか否か、これは以下の数章の考察によって確かめられることに他ならない。ここではとりあえず、憚代英の修養のもつ近代的、市民社会的傾向性を指摘するにとどめておきたい。

とはいえ憚代英は、儒教の道徳主義的・厳肅主義的な思想的・文化的伝統の中で、清初以来の名門の血筋を享けた知識人の家庭で生い育ってきた人間である。従ってそれらの呪縛から一挙に解き放たれ、新しい内容がストレートに新しい表現を獲得できたわけではありえない。思想的・文化的伝統の蓄積の重荷に押しひしがれて、手垢にまみれた古い表現を踏襲しなければならないこともあり、そしてそれに足枷をはめられて、新しいものが畸形的な歪な姿で現われざるを得ず、一見古いものと見紛われることもあり得るのである。憚代英にして、なお修養のモデルを儒教の先哲に仰がねばならなかったことのもつ重さを、簡単に見すごしてはならない。と同時に、その中で胎動を開始した新しいものが、古いものと抗いせめぎ合いつつその殻を必死で打ち破ろうともかく姿にも、十分に眼を注ぐ必要があろう。

ともあれ憚代英の道徳的修養のもつ真の姿については、彼の道徳哲学の検討の際に、再度振り返って論じられることになる。

注

- (1) 狭間直樹『五四運動の精神的前提——憚代英のアナキズムの時代性』（東方学報61冊 一九八九年）、砂山幸雄『五四』の青年像——憚代英とアナキズム』（アジア研究 三五—二、一九八九年）など。
- (2) 沈葆秀『憚代英和他的日記』（『憚代英日記』所収 一九八一年）
- (3) 「委曲求全」という言葉を憚代英はとりわけ多用している。日記 一九年一月六日など。
- (4) 日本人の日記研究の書としては、小田切進『近代日本の日記』、『近代日本の日記』（一九八四年、八七年。講談社）、紀田順一郎『日記の虚実』（一九八八年、新潮社）を参照した。

(5) 川端康成の茨木中学に提出した日記はその好個の例である。彼は自己用の日記と並行して二種類つけていたという。著しく形式化し偽善的になった日記の例としては、熱田公の一五歳、陸軍幼年学校時代の日記(歴史評論 一九七七年二月号より同十月号、六回掲載)参照

(6) 個我的自覚、内面の心理の重視、私的生活領域の不可侵性の確立といった条件が、それまでの中国の思想・文化の中に生み出され、育まれていなかったことが、その大きな原因ではないかと、筆者は考えている。

(7) 『胡適的日記』(手稿本)の第一冊の呉大猷の序文によると、留学日記の続きの二一年から三五年の一五年分の日記は、胡適自身が駐米大使をやめた時にマイクロ・フィルムに撮ってもらったという。従って彼の場合は、日記の公表は常に念頭にあったと見られる。

(8) 家永三郎『津田左右吉の思想史的研究』(一九七二年、岩波書店)の、日記を駆使しての津田の中国観・朝鮮観についての評価には、大いに疑問が残ると言わざるをえない。公表された文章に津田は後から何度も加筆補訂を施している人物であることについては、家永氏自身が文中で注意しているからである。

(9) 『惲代英日記』(以下、日記とする) 一七年一月十二日、同十二月十六日など。

(10) 惲代賢(子強)『惲代英入学前軼事』(『回憶惲代英』所収)

(11) 注(2)に同じ

(12) 日記一八年五月十八日

(13) 日記一七年五月二十二日

(14) 日記一九年十二月二十九日

(15) 日記一八年三月十七日、一九年三月十八日など。一九年十二月二十九日では、「三天一記、五天一記」としている。

(16) 日記一九年一月十四日、十二月二十七日など。

(17) 日記一七年一月二十四日、十二月十六日、十二月三十日、一九年

一月十四日など。

(18) 日記一九年二月十九日、三月二十六日、四月十日、四月十三日、四月十四日など。

(19) 日記一九年一月一日、二日。なお年賀状の全文は『惲代英日記』四五三頁参照

(20) 『惲代英日記』四七二頁参照

(21) 注(2)、(10)参照

(22) 日記一九年一月一日

(23) 日記一九年一月十四日

(24) 陳左高『中国日記史略』(一九九〇年、上海翻訳出版公司)。明の呉康齋については、容肇祖『明代思想史』参照。嵯峨隆『呉稚暉の出發』(東亜一九八六年五月号)。

(25) 宋教仁日記一九〇五年二月二十三日、三月四日。黄尊三留学日記一九〇八年一月一日、同二月一日。謝覺哉日記一九二一年十一月四日など。

(26) 『達化齋日記』一九一四年九月十二日、同十一月二十一日、一五年三月四日など。

(27) 甲午日記旧曆九月二十四日、『笨生隨筆』など。

(28) 留学日記一九〇六年旧曆五月十九日、一九〇八年旧曆八月四日、一九一〇年旧曆一月十七日など。

(29) 一九〇六年一月四日、同一月十一日、同一月二十七日、同一月三十一日、同二月九日など。

(30) 胡適留学日記一九一一年六月十八日附載の章希呂への手紙。

(31) 一九一三年九月一日、同九月二十九日、同十二月十五日など。

(32) 戊午日記一九一八年一月一日に、「今より以往、希聖をば懐となし、永く陸王の学を崇びて以て心を治め、仍ほ曾胡の説を採りて以て世を淑せん」とある。一八年一月五日、二月十八日、十二月二十一日、一九二三年三月二十八日など。

(33) 一九一九年五月一日に曾國藩の『原才』を書き写している。一九

- 二二年二月二十五日、同二月二十六日参照。
- (34) 日記一八年三月二十九日に、友人が来て曾国藩の家書の読後感を述べた語を記録している。
- (35) 注(10)参照
- (36) 日記一七年一月十五日、一月十八日、一月十九日。一八年五月二十四日、六月二十七日など。
- (37) お互いに日記をつけて報告したり(日記一七年十月三十日)、日記を伝観(まわし読み)して報告に代えたり(日記一八年二月十五日)している。憚代英自身はそのため特に互助日記という別の日記をつけてさえいる(日記一七年十一月二十六日)。
- (38) 日記一七年十一月二十六日
- (39) 日記一七年十二月二十七日
- (40) 兄の発病の経緯については、注(10)参照。日記一八年三月二十八日には、伯父、父、岳父が憚代英が悲しみの余り、狂疾を致すのではないかと心配していることを、本人が知ったことが述べられている。
- (41) 注(20)に同じ。
- (42) 道光二十年旧曆四月二十二日。改号の由来は、明の袁了凡の「従前の種々は」で始まるかの有名な語による。同じ語は、憚代英も『自訟語』(学生雑誌三巻八期、一六年八月)に引用している。ところでこの語は注(57)の奥崎裕司によると、袁了凡の自伝「立命篇」に出るものであり、元来は雲谷禪師の袁への言葉だといふ。
- (43) 憚代英も一八年の日記の付録に、自分用の口過八条、身過十五条、心過六条をあげている。
- (44) 道光二十二年旧曆十月二十六日付の家書『致澄弟温弟沅弟季弟』の中で、「朝廷以制芸取士、亦謂其能代聖賢立言、必能明聖賢之理、行聖賢之行、亦可以居官莅民整躬率物也」と述べる。
- (45) 日記一七年十二月二十二日
- (46) 道光二十二年旧曆十一月二十六日、同十二月十六日、十九日など。
- (47) 日記一九年二月五日。同五月十四日では、「皆明らかに罪悪で決して過失ではない」と言う。
- (48) 咸豐十年旧曆閏三月二十九日付の家書『致澄弟』
- (49) 楊昌濟『達化齋日記』一九一五年四月五日には、彼の学生で湖南省の山に囲まれて他地方と隔絶した農村に育った毛沢東を、「農家には多く異材が出る、曾滌生・梁任公の例を以てこれを勉す」とある。また黎庶昌編『曾文正公年譜』道光十八年の条参照。
- (50) 道光二十二年旧曆十一月八日、十二月四日、十二月七日の日記参照。
- (51) 前掲『自訟語』。彼の字の子毅は、父が意志薄弱を戒めるためにつけたという。
- (52) 楊効春『蕪湖宣城兩処の學校參觀記』(中華教育界十一巻一期、二二年一月)によると、安徽宣城第四師範で教鞭を執る憚代英が毎朝早く起き、十数人の生徒と運動場を十余周している姿が報告されている。
- (53) 大宅莊一『青春日記』(上・下、中公文庫)は、一九一五年(大正四)七月から一八年(大正七)十一月まで、即ち彼の十四歳から十八歳までの大阪府立茨木中学時代に教師の求めに応じて書いた日記である。注(5)の川端康成はその上級生である。
- (54) 華中師範大学学長で、中国近代史研究者として著名な章開源氏は、「社会土壤学」なる新しい学問方法による地域史研究を提唱されている。
- (55) フランクリンの自伝については、原文のほか、松本慎一・西川正身訳、岩波書店刊の訳文を参照した。
- (56) 一九年三月の時点で三版が出ている。初版発行の正確な日付は不明である。
- (57) 平野義太郎『支那における郷党の社会協同生活を規律する民族道徳——功過格を中心として——』(原戴『法律時報』十五—十一、今「大アジア主義の歴史的基礎」所収)、酒井忠夫『功過格の研究』

() 『中国善書の研究』所収、奥崎裕司『中国郷紳地主の研究』(一九七八年、汲古書院) など参照

(58) 『The Foolish Question』(学生雑誌二巻二号、一五年二月)

(59) 惲代英は日記一七年十二月二十一日で、黄炎培の『青年自省二十則』(『抱一日記』一六年六月四日、『教育雑誌』八巻六号所収) を細かく検討して自分の修養に役立つところを探り入れたいと言っている。これは元来、アメリカ人ボリントンの『人生勝利術之發明』に基づいて、黄炎培がアレンジしたものである。黄炎培はこの二十の点検項目の一つについて五点として、百点満点で毎日採点するよう提案している。そして翌二十二日から、惲代英は修養の採点を開始している。また『淑身日覧』もYMCAから借り出して読んで、『完人之範』を真似たものである。『完人之範』が書名から見て、アメリカ伝来のものであることはまず間違いない。更に『寒假自省表』も、アメリカ人ローズ・ウェストン・バルの『二十世紀之学校児童健康十字軍』に倣って作成したものである。従って惲代英の修養が、フランクリンに似るのは全く当然のことであった。また胡適はアメリカ留学中の一五年三月八日の日記の中で、ニューヨークの公共図書館の活潑な活動に言及し、帰国後に「公共蔵書楼」を創立したいとの夢を記している。これを惲代英の「啓智図書室」のアイデアとつき合わせて考えるならば、公共図書館の発想自体はやはりアメリカ経由であると見るのが最も自然である。そしてアメリカで公共図書館設立を創唱したのがフランクリンである以上フランクリンの思想的影響を否定するわけにはいかないだろう。

(60) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

(補注)

この論文を印刷所に送って後、注(58)が東京都立中央図書館特別文庫(実藤文庫)から入手できた。それは、the Mutual Improvement SocietyにおけるFreeman 惲代英の演説という形をとった文章である。ところでフランクリンの我々のクラブは a club of mutual improvement

である。従ってここからも惲代英がフランクリンの自伝を読んでいた可能性を指摘できる。また惲代英が『中国青年』誌上などで用いたペンネームのF・MはこのFreemanから引き継がれたものと見られる。この自由人はかつてエンゲルスなども属していた、一八四八年三月革命前のベルリンの「自由人」クラブに対する惲代英の共鳴によるという(羅章龍『十年道誼兼師友試釗石前淚泗沱』、『回憶惲代英』所収)。また同じ頃用いたペンネーム「但一」が、もしそれが「唯一」を意味するとしたら、日記一九年九月二十六日の「応覚我們是中国唯一可靠的救星」、同二十七日の「中国的唯一希望是在我們——我們便是說惲子毅同惲子毅的朋友」の自負に由来するものと思われる。